

論文の和文要旨	
論文題目	コーパスに基づくインドネシア語の接頭辞 ter- の研究
氏名	佐近優太

本稿のテーマはインドネシア語の接頭辞 **ter-**の機能の考察である。インドネシア語の接頭辞 **ter-**は基本的な使用法として、(a)他動詞的意味を持つ語基に付いて受身文の標識となる、(b)自動詞的意味を持つ語基に付いて非意図の意味を表す、(c)形容詞的意味を持つ語基に付いて最上級の意味を表すという3つがある。このように接頭辞 **ter-**は多義的であるため、複数の用法間の関係性を捉える研究がこれまでなされてきたが、以下の問題が残っている。

- ・ 実例に基づいた接頭辞 **ter-**の記述の検討や、用法の定義がなされていない
- ・ 代表的とされる意味・用法の考察は行われているが、その他の用法との関係性が議論されていない

そこで本稿ではコーパスデータに基づいた分析により以下の5点を明らかにすることを目的とする。

- ・ 先行研究の記述を検討した上で、実例に基づいて接頭辞 **ter-**が表す意味を明確な基準によって分類する (2章)
- ・ 接頭辞 **ter-**が付与する複数の意味を統一的に捉える (3章)
- ・ 受身文を形成する接頭辞 **ter-**に対して与えられた分析が自動詞語基の場合の意味表出の制限や、構造変化の有無を説明できることを示す (3章)
- ・ 動作主を標示する前置詞 **oleh** との関係を実例に基づいて記述し、標示方法の選択要因を明らかにする (4章)
- ・ 3章で行った分析を基に、動詞用法の接頭辞 **ter-**と最上級用法の接頭辞 **ter-**の関係を説明する (5章)

2章では接頭辞 **ter-**が用いられた際に現れる意味の規定を行った。接頭辞 **ter-**は「結果状態」「可能」「非意図」のような様々な意味を付与する。しかしこれらの用語は、明確に定義されることなくそれぞれの先行研究で恣意的に用いられてきた。結果として用語に揺れがあったり、同じ用例に対して異なる分類がなされていたりするという問題があった。そこで

本稿ではコーパスや Web 上の例文を参照して接頭辞 **ter-**が表す意味について、事態の中のどの部分に際立ちが与えられているかという分類の基準を設けることで完了・非意図・判断・潜在系可能の4つを再定義した。また完了用法の下位には文脈的条件によって分かれる結果状態と認識との相違用法を設定した。

続く3章では、2章で定めた接頭辞 **ter-**が付与する意味の分類を基に、事象構造の考え方をを用いてそれぞれの意味の表出の仕組み、構造変化の有無の要因、接尾辞 **-kan** との関係、の3点を明らかにした。議論の前提として本稿では接頭辞 **ter-**の事象構造を「動作主が存在し、動作対象に働きかけを行い、その働きかけによって動作対象が何らかの状態に変化する」という事態を基に、その動作対象に生じる事態つまり事態成立局面、または行為の非意図性が認知的際立ちを帯びる」と定めた。まず意味の表出について、先行研究では接頭辞 **ter-**は「なる」的表現(cf. 池上 1981)であるとして、そこから種々の意味が派生すると考えられていた。しかし、この分析には自動詞語基の場合に可能の意味などが表出しない原因を説明することができないという問題点があった。そこで本稿では上記のように接頭辞 **ter-**の事象構造を設定し、語基の事象構造との合成が行われると考えることで説明を試みた。具体的には自動詞語基との合成の場合には動作主の分節が合成結果に表れないために、動作主の意図を含意する必要がある実現系可能の意味などが表れないと分析した。構造変化や接尾辞 **-kan** に関しても同様に、事象構造の考え方をを用いることで一貫した説明を与えることが可能になることを示した。他動詞語基に接頭辞 **ter-**が付与された場合、基本的に受身文の述部の主要部となるが、一部の語は能動文に現れることが出来る。こうした能動文での接頭辞 **ter-**+他動詞語基はこれまで例外とされ、詳しく分析されてこなかった。しかし本稿では、接頭辞 **ter-**が付かない場合と比べて認知的際立ちの位置が変化するかどうかが重要であると考えた。認知的際立ちの位置の変化は、語基の事象構造に動作主から動作対象への働きかけが含まれているかで決まり、働きかけが含意される他動詞が語基の場合は認知的際立ちの位置が変化し受身文となり、自動詞や働きかけが含意されない他動詞が語基の場合は認知的際立ちの位置が変化しないため構造変化が起きず、能動文になることを主張した。最後に接尾辞 **-kan** について、先行研究では接尾辞 **-kan** を伴っていれば可能の意味が出やすいことが指摘されていたが、その理由は明らかになっていなかった。本稿はこの問題に対しても事象構造の考え方をを用いることで解決を試みた。結果として、意味の帯びやすさは接尾辞 **-kan** が直接影響しているというよりも、接尾辞 **-kan** によって事象構造が変化したためであることを明らかにした。このように3章の意義は、事象構造を設定することでこれまで例外的に考えられてきた現象を統一的に説明できることを示した点にある。

4章では接頭辞 **ter-**の受身文における動作主標示の選択要因について考察を行った。インドネシア語の受身文において、動作主は主に英語の前置詞 **by** に当たる **oleh** か、それが省略された形である **zero** 標示によって導かれる。ただし先行研究ではこうした選択があるのはもう一つの受身接辞である接頭辞 **di-**の場合に限られ、接頭辞 **ter-**の場合は省略できない、つまり **oleh** 標示しか使うことが出来ないと分析されてきた。しかし実際の用例を観察すると、

接頭辞 **ter-**の場合でも **zero** 標示を取るものが多く見られる。ここから本章では実際にどの程度 **oleh** 標示と **zero** 標示が使用されているかを記述するとともに、その選択要因を明らかにすることを試みた。分析にあたっては動作主・動作対象の有生性、動詞の意味、動作主項の語数を考慮し、一般化線形混合モデルに基づくロジスティック回帰分析を行った。結果として以下の点が明らかになった。

- ・「動作主から動作対象への働きかけ」が強ければ **oleh** を取りやすく、弱ければ **zero** を取りやすくなる。
- ・動作主が有生物である場合、無生物の場合よりも **oleh** を取りやすい。
- ・動作対象が有生物である場合、無生物の場合よりも **zero** を取りやすい。
- ・動作主の語数が多いほど、**oleh** を取りやすくなる。

本章の特徴は、一般的な傾向に加えて動詞固有のふるまいも分析したという点である。回帰分析により動作主標示選択の一般的傾向として上記の点を明らかにした後、個々の動詞を変量効果に入れたことを利用して、一般的傾向から外れるふるまいを示す動詞に関してその理由の考察を行った。結果として他構文との曖昧性解消という動機や、共起する名詞の偏りによって動作主の標示選択が変化することを示した。

5 章では最上級表現を形成する接頭辞 **ter-**に関して考察を行った。先行研究では最上級の接頭辞 **ter-**は動詞語基の場合に生じる完了の意味からの類推で生じたとされてきた。しかしこの分析は調査対象となる資料が限られており、具体的な事例が少ないという問題点があった。そこで通時コーパスを用いて用例を検討することで、1700 年代までは接頭辞 **ter-**が形容詞的意味を持つ語基に付いた場合は「語基が表す状態への変化」を表す標識として機能し、最上級の用法が卓越するのは 1800 年代以降であることを明らかにした。加えて接頭辞 **ter-**派生形容詞が **segala**「すべての」や **lainnya**「他の」などを伴う名詞句との比較の文脈で現れやすいことを指摘した。こうした発見から、接頭辞 **ter-**は「完了 >> 語基の表す状態への変化 >> 最上級」という変化を経たことを提案した。つまり元来接頭辞 **ter-**は「語基の表す状態への変化」という意味であったが、「すべての」や「他の」という意味を表す語と共起し「すべてのものより～である」という実質的な最上級の意味で使われることが多くなり、その結果現在の最上級としての用法が定着したという主張である。この分析の利点は二つある。一つは語基の表す状態への変化という意味を表すと考えることで、動詞語基に付いた場合の意味の一つである完了と同じように意味表出を捉えることが出来るようになる点である。もう一つは類義形式である **paling** との差異を説明できる点である。先行研究では接頭辞 **ter-**と **paling** の意味的な差は基本的に無いとされてきた。しかし **paling** が多くの語と共起できるのに対し、接頭辞 **ter-**は接続する語基に制限があり、その理由が明らかになっていなかった。そこで本稿ではその理由について、前述した古典マレー語における「語基の表す状態への変化」が影響していると主張した。現代インドネシア語において、状態変化を表す接辞

に接頭辞 **meN-**があり、そうした接頭辞 **meN-**は段階的变化を含意する形容詞にしか付けることが出来ないという制限がある。そして古典マレー語における意味が現代インドネシア語に影響を与えているとすれば、接頭辞 **ter-**も接頭辞 **meN-**同様に接続可能な語基に偏りがあると考え、調査を行った。結果として、接頭辞 **meN-**が接続できる語は接頭辞 **ter-**とも結びつきやすいことが明らかになった。この結果は接頭辞 **ter-**は古典マレー語における意味の影響があるため接続する語基の種類が狭まったことを示唆すると考える。

最後に本稿の意義は次の三点にまとめられる。第一に、これまで記述の少なかったインドネシア語の接頭辞 **ter-**について、事例に基づいた分析を行った点である。これにより、これまで見逃されてきた接頭辞 **ter-**に関する現象が明らかになり、そうした現象を踏まえてこれまでの研究を見直す形で分析を提示することが出来た。第二に、抽象的スキーマを維持しつつも語基の意味という細部に注目することで、意味表出の傾向や条件を説明することを可能にしたという点で意義がある。接頭辞 **ter-**には本稿で言及したように様々な機能がある。先行研究では動詞語基に付く場合の複数の意味について「なる」的表現の形成といった説明によって一般化が図られてきた。しかし本稿ではある接辞を使用するためにはそうした抽象的なスキーマのような概念を設定するだけでは不十分であり、より詳細な知識も想定する必要があるという点を主張した。具体的には語基の意味に注目し、接頭辞 **ter-**との相互作用を考えることで諸現象の説明を行った。こうしたアプローチは今後インドネシア語の他の多義的接辞の研究に適用できると考えられる。第三に、語基・語根の意味に幅を認めることがインドネシア語の接頭辞 **ter-**の分析をする際に有効であることを示した点で意義がある。例えば構造変化に関して同じ語基でも能動文を取る場合と受身文を取る場合の両方の場合があるものがある。このとき動詞が二つ意味を持っているといった動詞そのものの性質に求めるのではなく、「話者がその語基をどのように捉えているか」で変化するという柔軟さを認めることで、ルールを増やすことなく一貫した説明を与えられることを示した。